

帰国した時期は、旅券が明治17年11月12日に返納されているところから、その少し前だろう。牧は帰国後東京大学医学部講師となった。これは時あたかも医学部教授の三宅秀が欧州に遊学するに際して、牧がその代理として別課医学生（通学生）に病理学を講じたのであった。だが結核のため間もなく職を辞し、鍋島家の主治医を兼ね芝櫻川に開業し名声があったが、1890年（明治23）6月18日死去した。もともと帰国後彼は健康がすぐれず、亡くなる前も須磨浦海浜病院に転地療養をしていたが、そこから帰京して急に病勢が進み死に至ったのである。享年40。『学士会月報』第29号（明治23年7月20日発行）は「会員ノ死去 ドクトル牧亮四郎氏ハ兼テ病氣ノ所養生遂ニ相叶ハズ去月十八日午前六時死去セラレタルハ誠ニ残念ノ至リト云フベシ」と簡単に報じたが、『中外医事新報』第247号（明治23年7月10日発行）は「故牧亮四郎氏」と題して略歴や葬儀の様なども報じた。それによると、牧の遺骸は6月20日午後2時出棺青山墓地に埋葬された。当日は大学より大澤謙二、小金井良精、丹波敬三、三浦謹之助の諸教授はじめ、陸軍や内務省からの関係者、それに親戚、知己等数百人の会葬があり盛儀だったという。ただし現在、青山墓地に牧の墓はない。青山霊園管理事務所の記録によると既に昭和9年以前に余所へ移されている。

## 藤山治一とメッケル將軍



藤山治一

1880年（明治13年）4月、佐賀鍋島侯の給費生として佐野常実、牧亮四郎、藤山治一<sup>はるかす</sup>の三人がドイツに留学した。この内佐野常実は有名な佐野常民侯の息子で、イエーナ大学に入学したが病気のために同地で亡くなった。牧はシュトラースブルク大学で医学を修め、同大学よりドクトル・メディチーネ（医学博士）の学位を授与された。そして帰国後帝国大学医学部の講師を勤めたが病気のため早く世を去った（明治25年）。この二人に対して、藤山は留学中に修得したドイツ語を生かして帰国後、独語学者として縦横に活躍した。特に、陸軍大学校教官としてメッケルらドイツ将校達の通訳を勤めたこと、それにドイツ兵書の翻訳並びにドイツ兵語辞書の編纂に当たった功績は大きい。

藤山治一は、早稲田大学に保存されている履歷書によると文久元年（1861）3月2日に生まれた。父は藤山治明。藤山氏は代々鍋島家の家臣であって肥前佐留志村に食祿を賜った。実弟の藤山安次は後年、実業家として名を知られた人である。母の藤山絹は鍋島直大侯の姫君である加賀前田侯夫人さよ子の乳母として鍋島、前田の二家に仕えて令聞があった。

明治6年頃、治一が14歳の時、旧佐賀藩の藩費によって国内留学生50名程東京に出すことになった。回想録「早大教授藤山治一氏」（大正2年4月号『読書之友』）によると、彼もこの機に乗じて50名の少年と共に、父に伴われて上京した。だが父には息子を教育するだけの資力がなく、鍋島家にいた母が学資を出した。それによって治一は赤坂離宮の近くにあった有馬学校



メッケル少佐

に入って英学を学んだ。次いで明治11年2月から同13年2月まで駒場農学校で修業した。だがその目的は農学ではなく、官費生になるためであった。ここでは獣医科に属し、首席を占めていた。当時彼は駒場の寄宿舎に住んでいたが、鍋島直大侯の子息・直映の相手をしていて日曜日毎に麹町永田町の鍋島邸へ出かけていった。そのお陰で鍋島家より毎月10円を貰い小遣いには困らなかったという。

明治13年に至り冒頭で述べたように鍋島家から佐野常実、牧亮四郎と共に、優等生だった藤山も選抜されドイツに派遣された。外務省外交史料館所蔵の旅券下付記録によると、当時藤山は18歳8カ月で、籍は「東京麹町区永田町式丁目壱番地寄留長崎県士族」である。これは鍋島直大侯の屋敷の住所と同じであり、藤山は駒場農学校を卒業後、鍋島邸に身を寄せていたことが分かる。長崎県士族となっているのは当時佐賀県は長崎県に属していたからだ。「事故」欄には「農学修業トシテ独逸国行」とある。免状渡し日は明治13年4月12日である。

留学先はベルリン大学であったが、入学前にまずドイツ語を学んだ。だがその間イエーナ大学に留学した佐野常実が急病に罹り、藤山はベルリンの日本公使館一等書記官で同じく旧佐賀藩の丹羽龍之助に命じられてイエーナに見舞いに行った。が着いてみると佐野は口も利けない状態で、まもなく亡くなった。まだドイツの事情に通じない藤山は葬式を出すのに大変苦労した。

ベルリン大学に入学したのは1880年（明治13）11月27日で、退学したのは81年12月12日である。農業経済論を学ぶために留学したのだが、実際は動植物学に興味を覚え、ボン大学に転学してからも専らその方面の研究に従事した。だがそれが青木周蔵公使に知られ譴責された。そして帰国を命ぜられた。旅費六百元を受け取ったが、ボン大学に戻り何喰わぬ顔で通学していた。それがまた公使館に知られ遂に鍋島侯から学資を差し止められた。それから藤山の本当の苦学が始まった。「三度の食事は二度に減じ、二度の食事は一度に減じた位で、ライン河の流れに身を投げて、永劫の楽土に憧憬がれんとしたこともあった」（「早大教授藤山治一氏」という。それでハイデルベルクに留学中の都築馨六や木場貞長やシュトラースブルクにいた友人の牧亮四郎からもお金を借りた。そうした藤山の様子を見兼ねて、ベルリンの公使館の丹羽龍之助は藤山の母に電報を打って六百元を送金して貰った。それによって藤山は明治16年10月頃ドイツを発ち、12月に横浜に着いた。

明治17年3月東京外国語学校の、同年12月農商務省の、同時に山林学校の各御用係を命じられた。また同じ頃独逸学協会学校の動植物学教員を依頼された。明治18年に東京大学予備門の教師となり、20年陸軍教授に任ぜられ陸軍大学校教官となった。この頃から彼の独語学者として精力的活動が始まった。

彼が陸軍大学校教官となった頃は丁度我が国の陸軍の開拓時代であって、陸大教官としてドイツから招聘されたメッケル將軍（当時少佐）その他三人のドイツ武官の教授は殆ど藤山らの通訳によってなされたのであった。当時藤山とともに通訳を務めた同僚には木越安綱、遠藤慎司、崎山元吉、やや遅れて司馬享太郎らであった。だが宿利重一『メッケル少佐』（日本陸軍

史研究第二卷)においてはメッケルのために通訳した人として遠藤と木越だけを挙げているのは公平さを欠くと思う。これに対しケルストの『メッケル伝』では「メッケルは日本語を話しも書きもできない。生徒はドイツ語が分からない。遠藤慎司と藤山治一が通訳を務めた」と書いている。これも勿論十分ではないが、遠藤と藤山が通訳の中心であったことを思えば、こちらの方が妥当な記述であろう。

ドイツ参謀少佐メッケルが陸軍大学校教官に招聘され来日したのは、1885年(明治18)3月であった。メッケルはベルリン陸軍大学校出の、モルトケ將軍の高弟で、理論・実践ともに優れた人物であった。彼は陸大教官として戦術・砲兵術・参謀服務要領・兵棋等を講述して、従来のフランス式の兵学によって教えられた戦術より一層高等で、しかも実践的な兵学を展開し、陸大生に感銘を与えた。また陸軍省・参謀本部の人々や師団の参謀に対しても講義し、聴講者と共にしばしば各地に参謀旅行(Generalstabsreise)を試みて指導した。さらに参謀本部兵事顧問として軍政改善に関する多くの諮問に答申した。彼の所論がいかに重要視されていたかは、当時彼の著書・筆記類が多く行われていた事実によって明らかである。

メッケルの契約期間は計3年で、1887年(明治21)3月17日を以て満期解傭となり、帰国した。その後ブランケンブルク大尉(のち少佐)、ヴィルデンブルッフ少佐、グートシュライバー少佐(のち中佐)のドイツ参謀将校が相次いで来日し、メッケルの仕事を引き継いだ。陸大生及び参謀官に対する戦術教育ではメッケルだけでなく、これら三人の教師の貢献も大きかった。ドイツ式兵学の導入と定着は、従ってメッケルを含む四人の独人教師の一体的功績と見なすべきである。そしてドイツ人将校の訳官を務めたのが、遠藤慎司、藤山治一をはじめ、辻春十郎、崎山元吉、太田豊之助、木越安綱、川上正光、司馬享太郎等であった。中で中心となって活躍したのは遠藤、藤山、司馬の三人であった。特に藤山は参謀旅行に14回余も参加しているほど精力的に活躍した。

藤山の陸大時代の功績としては、訳官の仕事のほかにドイツ兵語辞書の編纂とドイツ兵書の翻訳がある。前者には高田善次郎との共著『独和兵語辞書』(明治32年、独逸語学雑誌社蔵版)がある。四六版、432頁。限定一千部の予約出版であった。高田善次郎は明治時代の著名な独語学者・大村仁太郎の実弟であって、当時藤山と同じく陸大の独語教官であった。

明治時代に出版されたドイツ語の兵語辞書としては、この藤山・高田合著『独和兵語辞書』は、参謀本部によって編まれた『五国対照兵語辞書』(明治14年)及び参謀本部訳『改正兵語辞書 独和对訳之部』(同21年)に次いで早く出版された。兵語辞書は諸外国の軍事情報の研究や軍事留学には欠かせないものだった。普通の外国語辞書が十分な語彙を持っていなかった明治時代には、兵語辞書のような特殊辞典の利用価値も大きかったと考えられる。特にドイツ兵書の翻訳や軍関係者のドイツ留学が盛んであった当時であってドイツ語の兵語辞書は強く求められていた。藤山は序文で次のように述べている。

「我軍ノ独逸兵学ノ思想ヲ得タルハ「メッケル」將軍ノ功ナリトス將軍ハ明治十八年晋国参謀少佐ノ官ニアリテ我国ニ招聘セラレ陸軍大学校教官及軍事顧問ノ職ヲ奉シ居ルコト四年其間軍制ヲ改革シ軍棋及参謀旅行ヲ齎ラシ以テ我軍ヲシテ今日ノ進歩ヲ得セシメタル蓋シ我軍人ノ永ク忘却セサル所ナルヘシ(中略)余ノ独和兵語辞書ヲ世ニ公ケニセントスルノ志望ハ年既ニ久シ是レ我国従来此ノ類書乏シク二三之レナキニシモアラスト雖モ未タ以テ完全ナルモノ、存

セサラハナリ然ルニ近年同僚高田氏幸ニ志ヲ余ニ寄セラレ助クルニ編纂ノコトヲ以テセラレ」云々

『独和兵語辞書』は当時好評で、印刷部数は予定の数倍に上ったが、2年足らずで初版と増補改訂2版を売り尽くしたほどで、第3版（明治33年）まで出た。類書が当時殆どなかったこともあるが、本書がいかに軍関係者に有用であったかを示している。

続いて藤山は単独で『日独兵語会話』（明治33年）を南江堂より上梓した。これは会話力に優れた彼ならではのユニークなものだったが、内容が平易すぎたため却って専門家向きではなくなったことが前著のように売れなかった原因ではあるまいか。

ドイツ式兵学が導入されたのを受けてドイツ兵学書の翻訳が明治20年頃から参謀本部を中心に盛んになった。多くは参謀本部訳とか陸軍大学校訳になっており、具体的訳者名を欠いているが、藤山も翻訳に携わっている可能性が高い。藤山治一訳と明記してあるのは、ドイツの戦術家、戦史家として著名なフォン・デル・ゴルトツ男爵原著 *Kriegsführung* を訳した『交戦及統帥』だけである。上中下3巻から成り、明治39年9月から11月にかけて軍事雑誌社から出版された。クラウゼヴィッツの『戦争論』は難解なことで有名であるが、その影響を受けた本書も相当に難解である。序文によると翻訳に際して陸大の同僚川上正光と司馬享太郎の助力を受けたという。翻訳の困難性にもかかわらず、それをやり遂げた藤山の功績は大きい。

ところでメッケル少佐は明治21年3月24日、英国船にて帰国の途に就いた。4月船中で中佐に進級した。

帰国後、彼は連隊付になった。次いで大佐に進み、連隊長となり、その後将官でベルリン陸大の教官を勤めた。この間も日本の陸軍将校との付き合いは続いていた。1896年（明治29）6月、メッケル少将は現役を退いた。それから10年後1906年（明治39）7月5日、脳溢血のためベルリン郊外の自邸で死去した。なお、メッケルは日本政府から明治37年5月、我が軍事上に及ぼした功績が顕著であるとの理由で勲一等瑞宝章に叙せられた。

藤山は陸大教官を辞した後、早稲田大学初代ドイツ語教授に就任し、同校ドイツ語科の基礎を作った。この間種々のドイツ語の辞書・学習書・教科書を編纂しドイツ語界のために貢献するところ大であったが、1917年（大正6）5月13日、急性腹膜炎のために急逝した。享年57。墓は青山霊園にある。

幕末維新时期に佐賀藩からは各分野に人材が輩出したが、外国語学者としては藤山治一を第一に挙げるべきであろう。

## ドイツ語の達人 池田陽一

周知の如く、明治以降少なくとも昭和の戦前までは日本の医学はドイツの強い影響下にあった。医学関係者の留学先は殆どドイツと決まっていたし、学術論文も英語よりも独語で書かれる場合がずっと多かった。こうした独逸医学全盛の発端は明治初年に遡る。元来江戸時代に栄えたオランダ医学も多くは独逸書の翻訳であった。蘭語を通じて独逸医学を学んでいたわけだ。